

## 知事をはじめ各審査員等からのコメント

### 1. 大野 元裕 実行委員会会長（埼玉県知事）

本映画祭は2004年から「若手映像クリエイターの登竜門」として開催しており、今年で21回を数えることとなりました。今年は102の国と地域から1,201作品が集まりました。世界中の地域から応募されていることは、SKIPシティと世界がつながっているイメージが持てると思います。この1,201作品の中から24作品を上映し、白石和彌監督、横浜聡子監督を始めとする審査員の皆様に最優秀作品賞などを選んでいただく予定となっております。

今回、次世代の映像業界を担う若手クリエイターに向けた企画として、白石和彌監督と横浜聡子監督にご協力をいただき「商業映画監督への道」と題したトークイベントを実施いたします。この他、夜の涼しい時間帯を利用した親子で映画を楽しめる催しや、映像制作の楽しさを体験いただけるワークショップなども開催させていただきます。

映画を志す人、映画を観る人、そしてそこに参加をして雰囲気を楽しめる人、全ての人が楽しめるような催しにしていきたいと思います。

### 2. 奥ノ木 信夫 実行委員会副会長（川口市長）

映像クリエイターの発掘と育成、更にはデジタルシネマの普及を通じて映像関連産業の振興に寄与することを目的としている本映画祭も、今年で21回目の開催となります。

今年の国際コンペティションの審査委員長は、2009年の本映画祭にてSKIPシティアワードを受賞し、『碁盤斬り』が絶賛公開中の白石和彌監督に、さらに国内コンペティションの審査委員長は、2021年の映画『いとみち』などで活躍されている横浜聡子監督に務めていただきます。オープニングは、2020年に『写真の女』で本映画祭SKIPシティアワードを受賞し、昨年も国際コンペティションにノミネートされた串田壮史監督の新作『初級演技レッスン』で幕を開けます。各コンペティションの他、参加・体験型の企画を多数用意しています。

また、今年から主催者に加わった川口商工会議所が中心となり、川口駅東口キュポ・ラ広場にて賑わい創出と映画祭の誘客を促すPRイベント「Dシネマルシェ」を実施します。私が会長を務める「SKIPシティ国際Dシネマ映画祭を応援する市民の会」においては、今年も役員の皆さんに協力いただき、コンペティションの副賞となる協賛金をいただくなど、市をあげて映画祭を応援しています。映画祭の開催期間中はJR川口駅西口からSKIPシティへの無料バスも運行しますので、ぜひ川口に来て、映画をお楽しみください。

### 3. 八木 信忠 総合プロデューサー（埼玉県産業労働部顧問）

本映画祭は2004年に第1回を開催しました。2004年と言いますと、まだ映画は「電気信号で撮るものじゃない」という人々もたくさんいるような時代でした。2011年になり、ようやく日本のテレビ放送がハイビジョンになったわけですから、デジタルなんてダメだと言われていた2004年に「そんなことは無いんだ！綺麗に映せばちゃんと映るんだ」と言い続け、最新のプロジェクターを導入しました。

そんな最良を求め続けたデジタル画面を皆さんにお見せする本映画祭も 20 年以上も経ちました。今では世界中から作品が集まり、ますます盛んになっております。今後とも宜しく申し上げます。

#### 4. 白石 和彌 国際コンペティション審査委員長 (映画監督)

2009 年に初めて作った『ロストパラダイス・イン・トーキョー』が本映画祭のコンペティションに入り、そこから映画を作る人生のスタートが切れたという実感がとてもあります。それから 15 年も続いているということが有難いですし、D シネマ映画祭という点で言うと、もう今やデジタルで映像を作ることが当たり前のような世界になり、デジタルシネマを紹介しようという意味でのこの映画祭の役割はひょっとすると終わっているのかとも思う部分もありますが、わたし自身もその中に入っていると思いますが、たくさんのクリエイターや映画ファンが、この映画祭を通して生まれているという意味で、大変意義のある重要な映画祭と感じています。有難いことに何度か審査員のお誘いをいただいていたのですが、毎年夏の撮影が立て込んでいて何年もお引き受けできなかったのですが、今年はちょうどタイミングが合い、審査員をやらせていただきます。

僕も色々な映画祭に行くこともありますが、審査員なのにスクリーンで一緒に観ないという方もいるんですよね。僕は今回しっかりスケジュールを空けているので、最低でも審査する 10 本は必ずスクリーンで、クリエイターや観客の皆さんと一緒に観ようと思っています。毎日通って楽しみたいですね。これからもこの映画祭が続けていただけるよう、僕も精一杯、参加しながら盛り上げたいと思っていますので、皆さんも宜しく申し上げます。

#### 5. 横浜 聡子 国内コンペティション審査委員長 (映画監督)

大変光栄な役割を仰せつかりました。わたしは青森県出身で、青森にもかつては映画祭がいくつもあったんですが、今やゼロになってしまいました。地域で映画祭を続けることの大変さというものはたで見えていたので、SKIP シティ D シネマ映画祭がこんなにも長く続いていること、そしてそれを長らく支えていらっしゃる皆様に、心から敬意を表したいと思います。

若い作家がこういった大きな映画祭で作品を観てもらうことは、嬉しいことでもあり、反面、自分の計り知れない部分を数多くの他者の目にさらすことでもあり、時には厳しい批判や意見に向き合わなければならないこともあります。コンペティション部門に選出された作品はそういった宿命を背負っているのだと言えます。ただ、自作を多くの他者に観てもらい、そして作家自身が他者の作品を浴びるように観ることを通して、初めて自分の感覚というものが研ぎ澄まされ、更なる成長に向かっていくのではないかと思います。そういう意味でも、この映画祭は作り手にとって大変貴重な場です。わたし自身も、そうやって他人に見つけていただいて、今こうしてこの場に立っています。有難い言葉、厳しい言葉があって、今ここにいられます。今回は自分が審査員として、若い方々が更なる高みへと向かっていけるような言葉や、何かを、必死に探して伝えられたらと思っています。自由で刺激的な作品に出逢えることを楽しみにしています。

## 6. 土川 勉 映画祭ディレクター

お陰様で本映画祭は昨年 20 周年という節目を迎えることができました。そして 21 回目の今年は新たな出発の年となります。映画祭のオープニング映画は、串田 壮史監督による『初級演技レッスン』です。主役は、2011 年の本映画祭に短編部門にノミネートされ短編部門奨励賞を受賞した映画『ケンとカズ』のカズ役で出演した毎熊克哉さんに出演をお願いすることができました。毎熊さんもまた SKIP シティ国際 D シネマ映画祭に戻って来てくれました。

このように 21 年目を迎える本映画祭では、過去様々な映画人との出会いがあり、その出会いは決して偶然ではなく、むしろ必然であったようにわたしは感じます。これは本映画祭で出会ったその人たちが、その後の日本映画界を支えるような映画人となり、また戻ってきてくれる歴史であったように思います。このことは映画祭に携わる私たちにとっては本当に嬉しいことです。今後もこのような出会いを本映画祭は大切にしたいと思います。

## 7. 串田 壮史 オープニング作品『初級演技レッスン』監督

『初級演技レッスン』という作品は、僕にとって三本目の長編です。映画祭のルールでは、作品を応募できるのは長編 3 作目までなので、今回のオープニング作品で僕は SKIP シティ映画祭を卒業するということになります。夜、川口の繁華街で、上映を終えた映画人たちと交流するというのが映画祭の思い出として印象深いですね。僕はもう 3 回目なので、川口のディープな場所にもだいぶ詳しくなりましたし、今年はより深い話しを皆さんとしたいなと思っています。

『初級演技レッスン』は、映画祭のファンや地元の映画ファンの方々も楽しめるように作った作品です。と同時に、国際的な第一線で活躍しているの方々もわざわざ日本に来るインターナショナル映画祭ですから、そういったの方々にも目覚めの一発を届けられるような刺激のある作品に仕上がっています。ワールドプレミアなので作品の内容を深くは話せませんが、もしかしたらファミリー映画かもしれないし、またはホラー映画かもしれません。是非、ご期待ください。

